

## わたしという小宇宙、他人という小宇宙

### ——「ひとつの世界」という思い込み——

ふだんわれわれは、「大地はどこまでも平らで確固としている」と思っている。もちろん大きいなる誤解にすぎない。だが、同様の思い込みは、「世界」のイメージについてもいえる。

われわれは、暗黙のうちに自分と他人はひとつの世界（価値観）に住んでいると考えている。「この社会や世界は確固とした固定したもの」という抜きがたい信仰を持っている。そしてそのことを疑いもしない。だが果たしてそうであろうか？

古来、「自分が死ぬときは世界も終わる」と考える思索家は数多い。世界が存在するためには、それを認識するわたしという主体が必要である。主体があって、客体が初めて存在しうる。「我思うから世界がある」のであって、「世界があるから我思う」のではない。「いやいやそうではない、わたしがいなくても世界は存在する」という考えは突き詰めると成立しない。「我」が存在しないのにどうして世界が存在するといえるのか？

「世界が存在する」というときは、そう判断しているわたしの存在を前提としているのである。

「そんな議論が何の役に立つか」という読者もおられるだろうが、今少し待って頂きたい。後に述べるようにこの世界をどう捉えるかは、日々の生活や仕事の処し方にも大きな違いをもたらすのだから。

20代の頃、2冊の本に出会った。1冊目は確か『一流主義』というタイトルだった。細かいことはすっかり忘れてしまったが、ただひとつ今も覚えているのは「人生即主観」というフレーズである。

これは「人生はつまり主観的なものであり、主観を離れて人生はない」という意味合いらしい。言い換えれば「この世界は、客観的な存在ではなく、各自の物の見方や解釈の仕方によってさまざまに現れてくる」という意味で使われていたように思う（これは別段珍しい考えではなく、恐らくストア派の哲人エピクテトスの教えあたりを下敷きにしているはずである）。

当時のわたしにとって世界は確固としたものであり、客観的な存在であった。わたしは世界について明確なイメージを持っていた。自分の信じる宗教や哲学（わたしは自称禅宗徒であり、不可知論者であるつもりである）、善悪の色分け、社会的信条、その他さまざま

な事象について、わたしは確信を抱いていた。それが不確かな、個人のものの見方によつて違つて現れてくるとは、思えなかつた。「不正義」も見方によつては「正義」になる筈はない。そう思う人は思慮が浅く間違つてゐるのである……。

30年前のこと、わたしは会社を辞める踏切りがつかず、逡巡していた。

サラリーマン生活はそれなりに安穏なものだったから、学校をでてから5年も経つて今更司法試験を目指すのは不安だった。当時は終身雇用制が厳然としており、サラリーマンの転職は極めて珍しかつた。試験に失敗したら、再び大企業へ就職することは絶望的であつた。わたしはリターンマッチのない道へ踏み出すことに臆していた。

ちょうどその頃わたしはカーネギーの名著『道は開ける』を知つた。この本は要するに「積極的に物事を考えよ。挑戦せよ。そうすれば道は開ける」と教えていた。

2冊の本を繰り返し読むうちに、わたしは次第に弱気な物の見方から、強気な物の見方へと変わっていった。コップ1杯の水を、もう半分しか残っていないと考えるか、まだ半分も残っていると考えるかの違いは大きい。

わたしは「試験に失敗したらどうしよう」という不安を乗り越え、「なせば成る。なさぬは人の成さぬなりけり。」という精神主義的傾向に変わっていった。

わたしの変化は除々ではあったが、振り返つてみると、それは重大な転機であった。

以前のわたしは未来への不安に苛まれ、失敗したときのことを考えて怯む人間であったが、2冊の本から、物事を強気に考える見方を学んだ。こうして意識的に考え方を変えてみると、弱気のときと強気のときでは、世界の見え方が違うのであつた。「確固としたひとつの世界」が存在している、と思っていたのは誤解だった。わたしが弱気だから弱気に世界を見ていたのだし、強気になれば世界はそのように見えるのであつた。

その人の性格や、その時の気分や、気力の強弱、気分の良し悪しなどによって、世界はさまざまな様相を見せる。人間の気分はいつも揺れ動いて止まない。見る人によって世界はさまざまに見えてくる。

気分の滅入つた時は現実の否定的な側面だけに眼がいき、そのように世界を解釈してしまう。気分が高揚する時は、明るい面や楽観的なことに眼が向く。外部の世界は全てわたしの心の状態の反映にすぎない。わたしは自分の心を投影して、明るい世界や暗い世界を見ている。

## ——わかり合えない他者——

このように、ものの見方は年代によっても経験によっても、同一人と思えないほど劇的に変わるものである。20代のわたしの描いた世界像と、50代のわたしの抱く世界像では全く異なる。ましてや自分とは育ちも環境も違う他人は、わたしとは全く違う世界像を持っているだろう。

日本のように（擬似）同質社会では「話せばわかる」ことを暗黙の前提にしがちである。「とことん話し合っても絶対にわかりあえない他者」の存在に慣れていない。相容れない価値観を認めず、対立を曖昧にしたまま全てが流れていく。家庭でも、職場でも、社会でも、「個人の存在」は希薄である。

だが、それは単に表面上のことであって、個人の間の溝は意外に大きく、他者の内面はうかがい知れない。リストラ、不況、離婚、事故、災害など、危機的状況に直面して初めて自分と他人との暗い、深い溝に気が付く。同じ価値観を持ち、同じ物の見方をしていると思っていたのが、人生の裂け目に直面して、実は全く相反する見方をしていたことに驚く。果たしてわれわれは同じ世界に生きているのだろうか？いや、それぞれが別の世界、小宇宙に住んでいると考えた方が現実に即した解釈ではないだろうか？

文化人類学者の濱口恵俊教授は、西欧流の個人主義とは3つの要素を含むという（『日本らしさの再発見』）。

第一に、自分こそが人間世界の中心であるとする自己中心主義。

第二に、自己の生活をするにあたっては、他人への依存を否定する自己依拠主義。

第三に、対人関係を手段視する見方。

このうち個人主義の中核は「自己中心主義」である。「自己」こそが世界の中心であり、誰からもその権利を奪われてはならない。また個人主義の属性として、対人関係をひとつの手段とみなすという特徴がある。自立した「個人対個人」の関係は、あくまで自己にとって有利であるから維持されるに過ぎず、自己にとって役立たない対人関係はいずれ解消されてしまう。

他人を「自己の生存の手段」と見る見方は、日本人にとって非常に居心地が悪いが、このような「かたくなな個人主義」は西欧社会にみられる普遍的な精神である。西欧的精神の背後に、このような強烈な個人主義があることを知るべきであろう。

自分という存在は歴史上一回的な存在であり、個性的な存在である。

わたしは誰にも代替することができない。わたしにとって、自分が特別な存在である。どんな他人も自分と同じ重要性を持つことはない。

わたしはこのように世界の中心で、世界はわたしを中心に動いていく……はずである。だが、現実には、どうもそうはいかない。他人も「自分が世界の中心」と思っているらしいのである。そこに自他の深刻な衝突が起こる。

9月11日にアメリカで起きた同時多発テロは、西欧的価値観と全く異なった価値観を確信する人々の存在を露わにした。

この原稿を書いているのは事件から2週間経った時だが、日本でのマスコミの報道は、依然、「善と悪との戦い」といった二分法的正義観に基づくものが多い。だが、白か黒か、善か悪か、敵か味方かに割り切れるほど世界は単純ではない。「味方以外は全て敵」などといった文学青年的発想は、現実の世界で通用しない。むしろ「敵でない者は全て味方」くらいの余裕を持たなければ、一時的熱狂はさておき、長期的支援を多数の国から得ることはできないであろう。

ひとつの価値観を絶対の基準として「敵」を非難しても、相手がその基準 자체を否定しているならば、問題は未解決のまま先送りとなる。自分は正義の旗を背負い、相手は悪と割り切ることは、ひとつの世界に住み、同じ土俵の上で、同じ価値観を共有する仲間に對してのみ有効である。「敵」を非難することで味方の結束を固めることはできても、本質的な問題の解決とはならない。「敵」を完全に抹殺できない以上、また、倫理的にもそれが許されない以上、何とか共存する以外の道はない。

彼らはわれわれと全く異なった価値観や視点を持ち、異なった世界に住むと考えた方が、問題を本質的に解決する糸口をつかむきっかけとなるだろう。その方が問題の本質を理解し、より自由に柔軟な対策が可能となるからである。

極貧に育ち、教育を受ける機会にも恵まれず、つねに飢餓や伝染病に苛まれ、戦争しか知らない若者に、西欧的な価値観を説いても理解はできないだろう。日々の生存を懸けて闘っている者に、豊かな者が説教したところで心に響くわけはない。飽食の社会に育ちぬくぬくと暖かいベッドで寝ている者は、極貧の社会の下層で育った者の羨望、嫉妬、妬み、絶望を—わたしも含めて—理解できるとは到底思えない。

このように考えてみると、人は皆それぞれ違った世界（小宇宙）に住んでいる、と考えた方が現実的である。地球上に60億人近くの人が住んでいるとすれば、60億の小宇宙が

ある。この小宇宙は濃淡はあるが一部分重なり合っており、その部分が社会とか世界というものである。そう考えた方が現実に近いであろう。（注：現在の世界の人口は77億人である。以下、同じ）。

### ——小宇宙イメージの効用——

では、このような小宇宙イメージを持つことの効用は何だろうか？

第1に、この仮説の最大の効用は、事態に冷静に対処することができる点にある。

住んでいる世界が違うと思えば、「他者」を自分とは全く別個の存在として認識することが容易になる。

正義の御旗を掲げるだけでは、自他のギャップを正確に認識することはできない。なぜなら、「正しい」と思うとき、そこに必ず感情的要素が入り込むからである。そして感情こそは、現実主義者にとって最も危険である。事件や災害に直面した場合は、怒りや非難よりも観察が重要である。

ビジネスの現場でも交渉事でも紛争でも戦争でも、相手の立場に立って自分を見る眼を持たないと適切な対策は取れない。テロリストに対するためには、「テロリストの目」で見る心の余裕が必要である。「理解なくば対策なし」である。

相手が別世界に住むと思えば、多少は冷静に物事を見、感情的な判断を控えることができるようになる。ちょうど未知の国を訪れる探検家のように、怒ったり叫いたりするよりも、冷静な観察こそ身を守るのである。報復は感情からではなく、計算に基づいて行う方が有効である。冷静な対応こそが、本質的解決に資するだろう。

第2に、小宇宙のイメージは、物事を単純に白か黒かと決めつける二分法的思考を反省する材料となる。二分法的思考では、心理的に自分の立場に染まってしまい、灰色の世界が見えなくなる。自分の考えも、実は小さな完結した世界のそれでしかないことに、なかなか気付かない。

説得をしてもしきれない無数の他者が存在すると考えた方がよい。「60億の小宇宙」のイメージは自分を相対化するツールとなる。

このように世界を認識すれば、自分と意見を同じくする人との間の慣れ合いを防げるし、意見を異にする者を理解しようとする自制心が働く。

生まれて以来戦乱の中で育ち、敵を殺せば天国へ行けると信じている少年に、共感はできなくても、何とか彼を理解しようと努めるようになる。自分と意見を反対にする者、価値観の違う者、果ては敵でさえ、何とか許したり我慢することができるだろう。われわれは、

不快な「敵」とも共存して生きていかなければならぬ。二分法的思考からそういう発想は生まれ難い。

第3に、この仮説は人間存在を説明する上で、より現実に近い。60億人の人間が異なったイメージ世界に住んでいると考える方が、より正確な認識であろう。

常識的な見方には反するかもしれないが、人はそれぞれの小宇宙に住んでいると考えた方が現実にマッチしているのではないか。そして、正確な認識は人生のあらゆる面で役に立つものである。家庭内の不和、同僚との感情的行き違い、上司との軋轢など、異質の他者、わから合えない他者を前提として事を処理した方が、かえって良い解決策を見いだすことができる。

人間は多様な存在である。民族、言語、風土、文化、教育、年齢、性格など驚くほど違っている。もちろん同じ民族、同世代、同じ職業などについていえば共通の考え方や傾向が見られる。だが、それは各人の世界がその限度において重なり合っているのにすぎず、それぞれが全くユニークな世界に住んでいることを否定するものではない。

もし読者の方が、「その考えは間違っている」というならそれは大歓迎である。なぜなら、それこそわたしとあなたが別の世界に住んでいることの証拠なのだから！